

株式市場のリスクとリターン

辻

幸民

商学部 教授

一学年10名ちよつとのゼミです。研究分野はファイナンス。ゼミでは、企業金融と株式市場を勉強し、雑談するかのように議論しているのが特徴です。

ファイナンスとは、お金の融通にかかわる問題を経済学の観点から研究します。資金の融通には、お金を出す人とお金を受け取る人がいて、両者の間で合意形成がなされなければなりません。その合意形成で大事なのが「リスクとリターン」という点でしょう。お金を出す人とは証券を購入する者、お金を受け取る人とは証券を売却する者のことで、資金の融通とは実際には証券の売買という形をとることになります。リスクとは、さまざまなものがあり得ますが、ファイナンスの分野で問題にされるリスクとは、証券価格の変動性がその具体的な中身です。リターンとはいうまでもなく、その儲け（収益率）のことであります。さまざまな証券が実在する中、最も身近でかつ容易に利用可能なデータは株価ではないでしょうか。ゼミでの勉強は、株価をデータに使用して株式市場のリスクとリターンの関係について分析したりします。

実はこういう話をここで終えてしま

うと、大概是誤解を招きます。要するに辻ゼミは、株式投資で儲ける方法を研究しているのか、と。実態はこの逆でして、株式投資とはいかに儲からないものであるか、これがゼミの勉強から得られる話のオチです。専門的な議論でも「効率的市場仮説」という考え方があって、情報が効率的に株価に反映される限り、超過利得を続けて得ることはできないとされています。ゼミでは、ファイナンスの基本的な考え方を輪読によって勉強し、同時並行で株価を使ったパソコン実習もやります。そのためゼミの時間は、どこまでが雑談でどこまでが勉強のための議論なのか一見すると曖昧だったりもします。結局のところ、ゼミ生各自の卒論に至る2年間の活動は、この「効率的市場仮説」の実証分析、つまり株式投資は儲からないことをデータで確認しているだけなのかもしれません。それでも若い人々にはきっと良き教訓となりましょう。「濡れ手で粟」はありません。「額に汗して働く」ことこそが肝要。

活動を支える活動

しいのかなこ
椎野叶子君 商学部4年（2019年3月卒業）

部活動やサークル活動等、ゼミ以外の活動にも全力で取り組むメンバーの多いことが辻ゼミの特徴です。それぞれが「頂点」を目指して活動しています。私は4年間、体育会馬術部に所属していました。早朝から練習をして馬の餌やりを終え授業を受けるという日々のなかで、教授やゼミ員と会って輪読を行ったり企業金融に関する講義を受けたりする木曜日は、刺激的で濃密な時間でした。私は引退競走馬と関わっていたため、競馬と経済活動の関係性について研究を進めてきました。一つの辺で「頂点」は作れません。辻ゼミと部活動の両立の日々が、充実した学生生活を構成してくれました。



薬物治療の個別最適化を目指して

なかむらとものり
中村智徳

薬学部 教授

当部門は学生約35名、教員5名で構成され、「医療薬学教育の洗練化」、「個別化薬物治療」および「漢方薬の薬効薬理」を二本柱とした研究に取り組んでいます。

医療薬学・社会連携センター 医療薬学部は薬学部6年制教育における薬学臨床教育を担い、2010年から卒論生が配属し研究がスタートした10年目を迎える教室です。当部門では

「科学力」を兼ね備えた薬剤師研究者(Pharmacist-Scientist)や、薬が関わる幅広い領域でリーダーとして活躍する人材育成をモットーに、「医療薬学教育の洗練化」、「薬物治療抵抗性の発現機構解明と薬動力学解析に基づく個別最適化」および「漢方薬の適正使用の推進と薬効薬理メカニズムの解析」を研究の三本柱としています。

米国オバマ前大統領が2015年の一般教書演説で発表した「プレジジョン・メディシン(精密医療)」は、最先端技術で患者の細胞を遺伝子レベルで解析し、一人一人に最適な治療法・医薬品を用いる医療です。現代医療では患者さん個々に最適な医療を提供する「個別化医療」が大きく期待されており、当教室も臨床現場に山積する問題を「患者個別化」の視点で解決すべく

研究に取り組んでいます。ところで、

漢方薬は「古いくすり」で安全そうだけど本当に効くのか?と思われている方もいるかもしれません。それは「なぜ効くのか?」が科学的にほとんど証明されていないからだと思われそうですが、漢方薬は長い年月をかけて患者個々に対する処方基準に相当するものが確立されてきました。つまり東洋医学的な見立てに基づいた「薬物治療の個別最適化」とも言えるのです。そこで私たちは、漢方薬の効く人と効かない人の違いをさまざまな検査データや患者さんの訴える言葉、遺伝子情報などから総合的に解析し、漢方薬の処方基準である「証」の科学的解明に挑んでいます。当教室ではこれら以外にも克服すべき多くの臨床的課題をテーマとしており、薬学部薬学科4〜6年次卒論生および博士課程大学院生個々に研究テーマを割り当て、新たな知見を臨床現場に還元すべく、指導教員も学生たちと研究の楽しさと厳しさを共に味わいながら毎日を過ごしています。

セミナー合宿を立ち上げた思い出

さくやまふみひろ

菊山史博君 薬学部薬学科6年(2019年3月卒業)

当教室では毎年、ひと時大学を離れてセミナー合宿を開催しています。私たちが企画した合宿旅行では、プレジジョン・メディシンに関する最新研究の紹介と今後の研究計画の立案について討論しました。合宿初日のセミナーに向けて、日々の研究と並行して準備をしたこともありとても大変でしたが、同期生と切磋琢磨する中で何とか資料を作りあげました。セミナーでは教員から厳しい指摘を受けましたが、褒める時はしっかり褒めてくださり、質・価値の高い学習となりました。セミナーに疲れ果てた後は全員で和気藹々と食事、温泉、ボードゲームと大いに盛り上がるなど、公私共々真剣に向き合える素敵な教室です。

